

ボール遊びの中で感じたうれしさが 優しさの循環になるように

幅広い年代に野球の楽しさを伝える
みんなの監督

関 島 資 浩 さん



昔はちょっとした広場があればプラスチック製のバットで野球をしたりキャッチボールをして遊んだりする子どもたちの姿が見られました。しかし現在はバットを振っている位なにと注意されることもあります。プロ野

あづみの野球フェスタを主宰し、多くの人に野球の魅力を伝えている関島さんに話を聞きました。

気軽にボールに触れる機会を

10年前と比べて野球をする子どもが激減しています。かつては市内の各地区にリトルリーグがありましたが、今ではアルプスリーグとして安曇野と大北地域が一つにまとまって活動。中学校でも各年の単独チームでは試合に出場できなくなり、3年ほど前から合同チーム・オール安曇野を結成して出場しています。

子どもの数が減ったことも大きな要因ですが、これほどまでに野球人口が減ったのは、多種多様なスポーツが選べるようになったことに加え、時代と共に環境が変化し、野球に触れる機会が減ってきているからだと思っています。

昔はちょっとした広場があればプラスチック製のバットで野球をしたりキャッチボールをして遊んだりする子どもたちの姿が見られました。しかし現在はバットを振っている位なにと注意されることもあります。プロ野

球がテレビで中継されることも減り、日常生活の中で野球に触れたり見たりする機会が少なくなりました。野球人として何とかしたいと思い、まずは気軽にボール遊びに触れてもらう機会を作りたいと考え、5年前からあづみの野球フェスタを始めました。

異年齢交流はやさしさの循環

あづみの野球フェスタは現在、中高生の野球部員に協力してもらいながら活動しています。「こうやると取りやすいよ」など、動きのコツをアドバイスすることはありますが、教えるというよりも投げたり、打ったり、捕ったりといったボール遊びを参加者と一緒に楽しんでいます。12月に開催した時には、チラシでの告知だけで約30人の子どもたちが参加してくれました。野球盤を模した「リアル野球パン！」やストラックアウトなどのブースに列を作って待っている子どもたちの姿を見たときは自然と笑みがこぼれました。また、中高生も一緒に笑顔を見せながら積極的に子どもたちと関わっており、あづみの野球フェスタという環境が異年齢交流の場となっていることに喜びを感じています。

子どもたちにとって異なる年齢の人と接し、つながりを持つことは大切なことです。それは、大きくなったとき



飯田市出身。豊科高校保健体育科教諭、野球部顧問。安曇野地区野球協会会長兼あづみの野球フェスタ実行委員長として、野球人口のすそ野拡大に尽力している。好きなプロ野球選手は野茂英雄。

MEMO
リトルリーグ
小学生世代を対象とした硬式野球のスポーツ団体のこと(中学生はシニアリーグ)。学童野球(小学生)や少年野球(中学生)は軟式野球を指す。
○あづみの野球フェスタ
園児や小学生が中高生と一緒にボール遊びをする申し込み不要の無料体験会。次回は1月31日(土)午前10時から常念ドーム、堀金総合体育館で開催。持ち物は上履き。

自分がしてもらってうれしかったことを下の世代にしてあげるといったやさしさの循環につながっていきます。まだまだ工夫が必要ですが、ボール遊びを通して野球に親しみをもち、ボール遊びは当然、今野球をやっている子どもたちも楽しみながら続けていけるように、今後もこの活動を続けていきたいです。



二十歳の集いが1月11日にANCアリーナで開かれ、約700人が参加し節目を祝いました。実行委員長の五十嵐千陽さんは式典で「私たちはこれまでたくさんの人に支えられてきた。これからは感謝の気持ちを忘れずに温かな灯火の光になれるよう歩んでいきたい。私たちが未来を照らす番」とあいさつ。周囲への感謝と本年のテーマ「灯火」に込めた思いを語りました。

本年の参加者は安曇野市誕生の年に生まれました。当日は市制施行10周年を記念して行われた「1/2 成人式」で当時10歳の自分が20歳の自分に宛てた手紙も配られました。式典の企画運営を担当した8人の実行委員の皆さんは、8月から準備を進め、工夫を凝らした交流企画や運営を行いました。最後には、参加者が決意を書いたランタンを一斉に飛ばし、未来への飛躍を誓いました。



令和8年 二十歳の集い

フォトスナップ

灯火

感謝の想いを受け継ぎ仲間とともに未来を照らす光